委員長メッセージ 第11期前半年4月号

＝ 思い起こせ ＝

のど元過ぎれば熱さ忘れる。と言うことわざもあるが、「忘れること、忘れられないこと、忘れてはならないこと」は、個人で、社会で、世界規模で様々ある。

忘れることを私自身におきかえれば、近年つとに物忘れが、、、というところか。

さて、二つ目の「忘れられない」は…。今年、あの３．１１東日本大震災から11年が経過した。３月11日早朝から春季交渉に関わる会議があり、その道中に、被災当時、組合長として想像を絶する状況の中で指揮を執り、生存確認や被災状況の把握、そのサポートに奔走し、後に市議会議員となった後輩にメールを送った。忘れられない日なのだろう、早朝にもかかわらず時を待たず返信があった。

「東日本大震災から11年が経ちました。今でも、あの惨劇が目に浮かびますし、被災して間もない時に基幹労連の仲間が駆けつけてくれて活動していただいたこと、そして心強く思ったことを思い出します。あの時を思い出すと涙が止まりません。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。これまで基幹労連の多くの皆さんから、温かいご支援をいただき、ありがたく思っています。被災地の復旧状況は、被災した防潮堤や施設などハード面は、ほぼ完了していますが、被災された方々のソフト面（精神的なこと、生活に関わることなど）へのケアが課題となっています。悲惨な思いを繰り返さないためにも、釜石防災憲章にもあるように「備える、逃げる、戻らない、語り継ぐ」の実践が必要であると考えます。コロナ禍で被災地域や被災された方々の復興が思うように進んでいませんが、少しでも前に進めることができるように、私なりに頑張りたいと考えています」。立場を変え、議員として被災地・被災者に寄り添い、労働運動で培った支え合いの精神で活躍している姿が目に浮かぶ。

その数日後、宮城、福島を中心に震度６強の地震が発生。東京23区に住む私でさえ、テレビを押さえたぐらいの大きな揺れ…。私たちの仲間が働く相馬では、工場も被害を受けたとの情報も入った。

翌朝には死者やけが人、家屋の損壊などのニュースが流れ、『自宅に大きなヒビが入り、福島市の娘の家に避難しているという76歳の女性は「修繕する資金もありませんし、自宅はもう諦めます。でも知らない土地に住みたくはないので、相馬で暮らし続けられるよう仮設住宅などを提供してほしいです」』と涙ながらに語る。その姿は他人ごとではないし、先の３．１１の尊い教訓を活かしていかなければならない。胸が張り裂けそうな苦しみや悲しみを私たちは忘れられない。

政研フォーラムの谷藤先生（早稲田大学名誉教授）が地方創生の理念・政策研究委員会報告の中で触れられている。危機管理学は危機対応や復旧のみならず、復旧を超えての再生が重要であることを教える。①危機に対応できる生活基盤や社会基盤を整える「減災」、②危機対応を支える物的・人的支援や行動を遂行する「準備」、③危機から生じる被災を最小限にする「緊急対応」、④未来を見据えての「復興と再生」、⑤一連の経験から導き出される危機についての「知と技術の習得と蓄積」とそれを減災へ連携させる試みを連続して行うことの大切さを説くものと。

危機管理は、個々人の意識も大切だが、地域・自治体ごとに、そして国を挙げて取り組まなければならない最重要なこと。しかし、なかなか現実は進んでいない気がする。

震災にも当てはまる言葉が三つ目。もう１カ月を超えたロシアの軍事侵攻。ウクライナを破壊し、世界秩序を破壊し、そしてロシアの運命をも破壊している。戦争には、どんな大義もない、憤りと悲しみしか湧いてこない。家を失い、家族を失い路頭に迷う子供たちの涙を見てはいられない。人類を悲しみのどん底に陥れた先の大戦を決して忘れてはならない。

こうした出来事は、あってはならない「格差・差別・貧困」を、世界で、わが国で助長しかねない。前出の市議会議員の思いもしかり。政治のプロセスを通じた幸せづくり、もっと・もっと進めていかなければならない。

政治には、働く者、生活者の安心・安定はもとより、国家、国民の命と財産を守るという使命があるはず。まっとうな政治、政治家をつくっていく必要がある。私たちには、村田きょうこがいる。

ご安全に

2022年４月１日

日本基幹産業労働組合連合会
中央執行委員長　神田 健一